

門馬 英寿

* あらすじ

入院中の愛川琴美は、夜中に聞こえてくる少女の声に、悩まされる。しかし、他の入院患者や看護師は、そんな声は聞こえないし、少女の姿も見ることがない、と言う。少女の声は毎晩段々と、琴美の病室に近づいて来る。遂にある晩、少女が琴美の病室に入ってきた。それは隣のアパートに住んでいる、少女であった。母親に部屋に閉じ込められていた、少女の魂が抜け出して、琴美に救いを求めてきていたのだ。

* 人物表

愛川琴美 (25)	入院患者
吉井綾乃 (31)	看護師
少女 (5)	
刑事 (52)	
子供 (4)	
その他 病院内のアナウンス (女声)	
救急隊員 (男声)	
など	

SE ベッドがきしむ音。

愛川琴美(25) 「眠れない……。病院つて、本当に眠れない……」

SE ベッドがきしむ音。

琴美「大体、夜の十時に眠れってというのが、無茶よね。私、今まで、一時とか二時まで、平気で起きてたんだもん。それが急に十時に眠れ、て言われても、眠れるわけないじゃん……」

SE ベッドがきしむ音。

琴美「今、何時？……。一時？……。一時って、普段の私が、ようやく寝る時間じゃない……。までよ、ということは、これから眠くなるってことか。ようやく眠れるわけね」

SE ベッドがきしむ音。その後、少しの間。

SE ベッドがきしむ音。

琴美「やっぱり眠れない……。眠れないものは、眠れない……。だいたい病院つて、静かすぎるのよね。物音一つ、しないじゃない。こんなに静かだったら、かえって眠

れないわよ……」

SE 遠くからかすかに、少女(5)の声が聞こえる。

琴美「え、何？……。今、何か聞こえたよ。うな気がしたけど……」

SE もう一度、遠くからかすかに、少女の声が聞こえる。

琴美「子供の声？ いや、まさか……。迷子かしら？ でもこんな時間に、子供がいるわけ、ないわよね。しかも病院に……。そら耳よね……。絶対、そら耳よね……」

少女「(遠くから、かすかに) ママ……。ママ……」

琴美「え、何？ 今の声？……。ママって、言わなかった？……」

少女「(遠くから、しかし前より近い感じで) ママ……。ママ……。どこにいるの？……、どこにいるの？……」

琴美「ママを探してる。もしかして、入院している子供さん？ 目が覚めちゃったのかしら？ でも夜勤の看護師さんがいるから、大丈夫よね」

少女「(前よりも近くなつて) ママ……。ママ……。どこにいるの？……。帰ってきて……」

琴美「おかしいわ、看護師さん、気付かない

のかしら、子供がいるのに……。私はベッドから出れないし……」

少女「(さらに近くなつて) ママ……。お願い、帰ってきて……」

琴美「(おびえた声で) なんか、だんだんこっちに来てる……。こっちに、近づいて来てる……。どうして、だれも気付かないの」

少女「(さらに近くなつて) ママ……。ママ……。どこにいるの……。帰ってきて……。帰ってきて……。お願い……。(少女の声、だんだんF・O)」

SE 小鳥のさえずり。カーテンを開ける音。

吉井綾乃(31) 「明るく、元気よく」おはようございます、愛川さん。よく眠れました？……。くすつと笑つて) 全然眠れなかったですね、その顔は」

琴美「(眠そうな声で) ああ……。おはようございます、吉井さん……。はい、その通りです。全然眠れなかったです」

綾乃「(笑いながら) 最初の晩は、みんな眠れないのよ。おんなじ、おんなじ……。心配しなくていいわ。そのうち嫌でも、眠れるようになるから」

琴美「そうだといいですけど……。眠れるようになりたいです。ほんとに……」

綾乃「大丈夫、大丈夫。今に消灯時間になつ

たとえに、ぐっすりよ。入院患者さんつて、みんなそうなのよ」

琴美「そうなのかしら・・・。そうだといいけど・・・。そういえば吉井さん、一つ訊いていい？」

綾乃「はい、何かしら？」

琴美「この病院に、子供が入院してるんですか？小さな子供ですけど」

綾乃「うーん、確か下の階の患者さんには、子供さんがいたけど・・・。でも子どもといても、中学生ぐらいよ。そんなに小さくはないわ」

琴美「そうですか・・・。じゃあ、違うわね」

綾乃「どうしたの、子供つて？・・・子供が、どっかにいたの？」

琴美「いえ、昨日の晩ですけど、子供の声でしたんです。真夜中ですけど」

綾乃「あら、そうなの・・・、どこで？どこで？」

琴美「はい、廊下で子供の声が、したんです」

ママ、ママつて、お母さんを呼ぶ声が・・・。でも、子供はいないんですもね」

綾乃「・・・入院患者さんの、お見舞いの人の子供かしら。・・・その、子供の声が聞こえたつて、何時ごろ？」

琴美「眠る直前ですから・・・、午前一時ごろです」

綾乃「それじゃ違うわね。そんな時間に、お見舞いの人は、残っていないわ。・・・きつと、そら耳よ」

琴美「そうだと、いいんですけど・・・。でも、確かに聞こえたような、気がするんです」

綾乃「そら耳よ。・・・入院した最初の晩だったから、気が昂ぶっていたのよ。・・・それか、夢でも見たか」

琴美「そうなのかしら・・・」

綾乃「きつとそうよ。夢でも見たのよ・・・。さあ、もう少ししたら、朝ご飯、持ってきてあげるわね。あなた両足怪我して、ベッドから動けないんだから」

琴美「あ、はい。すみません、お願いします」

SE アナウンス。医師、看護師、患者等の声など、昼間の病院内の、喧噪の音。

SE チャイムの音。

アナウンス(女声)「ただいま午後十時になりました。入院患者さんの、消灯時間です。入院患者さんは、速やかに自分の病室に戻つて・・・(F・O)」

SE ベッドがきしむ音。

琴美「やっぱり眠れない・・・。今、何時？・・・。午前一時？・・・。もう・・・。吉井さんは、今にぐっすり眠れるようになるつて、言ってたけど・・・。でも、やつぱり眠れない」

ぱり眠れない」

SE ベッドがきしむ音。

琴美「まあ、昼間、お昼寝しちゃったし。・・・ほんとに病院つて、死ぬほど退屈。本読むか、テレビ見るか、お昼寝するか・・・。ほかにすること、ないもの」

SE 遠くから、少女の声が、かすかに聞こえる。

琴美「え、なに？・・・。今、何か、聞こえた？」

SE また、少女の音が、かすかに聞こえる。

琴美「子供の声？・・・。いや、まさか・・・」

少女「(遠くから) ママ・・・、ママ・・・」

琴美「ママつて言ってる・・・。間違いないわ、子供の声よ・・・」

少女「(遠くから)。しかし前よりも近く) ママ・・・、どこにいるの？・・・、どこに

いるの？・・・」

琴美「(おびえた声で) こっちに来てるわ・・・。だんだんこっちに来てるわ・・・」

少女「(近づいて) ママ・・・。帰ってきて・・・。帰ってきて・・・」

琴美「(悲鳴に近い感じで) いや・・・、いや

や・・・、こつちへ来ないで！・・・。こつちへ来ないで！・・・。」
少女「(さらに近くなつて) ママ・・・、お願い、ママ、帰ってきて・・・、帰ってきて・・・、お願い、帰ってきて・・・、ママ・・・、ママ・・・。(F・O) 」

SE 昼間の病院の、喧噪の音。

SE ベッドがきしむ音。

綾乃「さあ、これでいいかしら・・・。じゃあ、お布団、掛けますね、愛川さん」

琴美「(力なく) はい・・・。」

綾乃「今、お薬、効いてきますから・・・。それでぐっすり眠れますからね。だから心配しないで・・・。」

琴美「(力なく) はい。すみません、吉井さん・・・。ありがとうございます・・・。」

綾乃「まずは、ぐっすり眠ることね。それで嫌なことは、忘れられるわよ・・・。ほんとに、びっくりしたわよ。愛川さんが、夜中にナースコール掛けたって、聞いたときには・・・でも大丈夫。何でもなかったんだから・・・。まずは、ぐっすり眠って、それで起きたら、気晴らしに何かゲームでもしましよう」

琴美「(力なく) はい・・・。」

綾乃「ゲームなんか、人が多い方が、面白いわね。6号室の多田さんも、呼びましよう

か。あと8号室の、田所さんとか。みんな気さくで、面白い人たちよ」

琴美「(少し明るい声で) 多田さんや、田所さんって、あの元気のいいおばさんたちねうん、あの人たちだったらいいわ」

綾乃「ようし、決まり。みんな呼びましようね。とにかく楽しまなくっちゃ。落ち込んでないで。楽しむのが一番よ」

琴美「そうね、そうするわ・・・。(力なく) でも・・・。」

綾乃「(心配そうに) うん? どうしたの? 」
琴美「その人たちも、言ってたんでしよう・・・。子供の声なんて、聞かなかったって」

綾乃「(ため息をついて) そう。多田さんも田所さんも。それからほかの病室の患者さんも。みんな口をそろえて、言ってるのよ。子供の声なんて、聞かなかったって・・・。」

そしてナースコールで飛び出してった、看護師さんも、(少し言葉を切ってから) 廊下に子供なんていなかったって、そうはつきり言ってるの」

琴美「(力なく) はい・・・。」

綾乃「だから子供なんて、いなかったのよ・・・。ほらさつき、先生もおっしゃってたでしょう。初めて入院した人には、気分の問題で、こういうことが起きることもあるって」

琴美「(力なく) はい・・・。」
綾乃「単に精神的なものなのよ、ただそれだけのこと・・・だからまずは、ぐっすり眠ることね」

琴美「(小さな声で、つぶやくように) でも、はつきり聞こえた・・・。」

綾乃「え? 」

琴美「(つぶやくように) 確かに聞こえた・・・。廊下で・・・。子供の声が・・・。」

綾乃「愛川さん! 」
琴美「(つぶやくように) ママ、どこにいるの? 帰ってきて、という子供の声・・・。その声が、だんだんこつちに、近づいて来る・・・。8号室の前、10号室の前、11号室の前・・・。」

綾乃「愛川さん! 」

琴美「(つぶやくように) 昨日の晩は、12号室の前まで来た。そこでぶつりと、声が消えた・・・。今日は・・・。今日の晩は、ここまで来るわ・・・。廊下の一番はじの、私の部屋・・・。13号室! 」

綾乃「(いらだつた様子で) 愛川さん、いい加減にして! もう寝ましよう・・・。そううだ、カーテン閉めるわね」

SE 吉井看護師が歩いて、それからカーテンを半分ほど閉める音。

綾乃「(つぶやくように) 今日も、いないわ」
琴美「え? 」

綾乃「あ、いや・・・。この窓の下の方に、アパートが見えるの。二階建ての、古いアパート・・・。その二階のベランダで、いつつも一人で遊んでいる、女の子がいる

のよ……。幼稚園ぐらい、4歳か、5歳ぐらいかしら……。いっつも真っ赤な服を着させられてるの。上下とも、真っ赤な服……。で、いつも一人で遊んでるの。ベランダで、朝から晩まで……」

琴美「そうなの……。かわいそうね、いつも一人って……。親は、いないの？」
綾乃「夕方になって、母親みたいな人が出てくるの。まだ若くて、髪を染めて、だらしない恰好をした人……。その人が子供の中にいれて、カーテンを閉めるの。それだけ。父親は見たことがない」
琴美「……いやだわ、そんな家庭って……。寒々として」

綾乃「そうよね……。で、その女の子だけど、2、3日前から、いないの。ベランダに姿を、見せないのよ。……だから看護師や患者さんの間で、話題になってるの。あの女の子、いないわねって。(くすつと笑って)入院患者さんって、暇でしょう。だからそんなことでも、話のタネになるのね」

琴美「(軽く笑いながら)それは分る。暇なもの。(笑わないで)でも、その女の子のことは、心配だわ、どうしたのかしら……。ごめんなさい、吉井さん。私、眠たくなってきた」

綾乃「あ、お薬効いてきたのよ。これでぐっすり、眠れるわ。じゃあ、おやすみなさい、愛川さん。起きたら呼んでね」

琴美「はい」

SE 昼間の病院の、喧噪の音。

SE チャイムの音。

アナウンス「ただいま午後十時になりました。入院患者さんの、消灯時間です。入院患者さんは、速やかに自分の病室に戻って……」
(F・O)

SE ベッドがきしむ音。

琴美「眠れない……。まあ、昼間あんなに眠ったんだもん。眠れるわけ、ないわよね」

SE ベッドがきしむ音。

琴美「でも眠らなきゃ……。また、あの声が聞こえてきたら、どうしよう……。あの声が聞こえないうちに、眠らないと」

SE 遠くから、少女の音が、かすかに聞こえる。

琴美「え?……」

SE また、少女の音が、かすかに聞こえる。

琴美「嫌! 聞こえてきた!」

少女「(遠くから) ママ……。ママ……」

琴美「(おびえた声で) ママって言うてる……。間違いない、あの子供だわ」

少女「(遠くから、しかし前よりも近く) ママ……。どこにいるの?」

琴美「(おびえた声で) だんだん、こっちに来るわ」

少女「(遠くから、次第に近づいて来る) ママ……。どこにいるの? 帰ってきて……」

真つ暗で怖い……。真つ暗で怖い……。

ママ、帰ってきて……。お願い帰ってきて……。……」

琴美「(その少女の声に、かぶさって) だんだんこっちに来る……。8号室の前……。10号室の前……。11号室の前……」

少女「(ずっと近くなって) ママ……。帰ってきて……。お願い、帰ってきて……」

真つ暗で怖い……。……」

琴美「(少女の声に、かぶさって) 12号室の前……。昨日の晩は、ここで消えた」

少女「(すぐ近くで) ママ……。帰ってきて……。お願い、帰ってきて……」

琴美「この部屋の前にいる……。ここで消えて!……。ここで消えて!」

SE ドアがギーと、開く音。

琴美「(悲鳴に近い声で) 嘘! 部屋に入ってきた!」

少女「(はつきりと聞こえる声で) ママ……、帰ってきて……。お願い」

琴美「嫌！」

少女「(すぐ近くで) ママ……、帰ってきて……。お願い。ママ……、帰ってきて……。お願い」

琴美「……あ、この女の子、真つ赤な服を着ている」

SE 救急車のサイレンの音。

救急隊員(男声)「(無線に話す調子で) 子供です。4, 5歳ぐらいの女児。衰弱します。意識なし」

SE 昼間の病院の、喧噪の音。

刑事(52)「いやー、危ない所でしたよ、ほんとに。救急隊員が、あのアパートに踏み込むのが、あと何時間か遅かったら、あの子は死んでた可能性があったそうです」

琴美「そうですか」

刑事「それで直ぐに、その子をこの病院に、運び込んだ。かなり衰弱してますが、助かるそうです。いや、ほんとに、愛川さんのお手柄ですよ」

綾乃「そうよ、間違いなく、愛川さんのお手柄よ」

琴美「あ、はい、ありがとうございます」
刑事「しかし何日も、子供をほったらかしに

しておくなんて、ひどい母親もあつたもんです。札幌でこんなことが起こるなんて、信じられません。……えーと、母親は24歳。すすきのでクラブホステスしてます。あの子とは二人暮らし。で、数日前から、男と遊び歩いて、ずっとアパートには、帰っていないかつたそうです。子供が勝手に出歩かないよう、アパートに外からカギをかけたままで」

琴美「ひどい」

綾乃「ひどいわ、信じられない」

刑事「まったくそうですな。本人の弁によると、冷蔵庫に食べ物が入っているので大丈夫、と思っていたそうです。……しかしその冷蔵庫に入っていたのは、冷凍とかインスタントとかレトルトとか、そんな食品ばかりだった。五歳の子供に、レンジの使い方は、わかりませんな。で、その女の子は、食べ物が無くなつて、衰弱し、昏睡状態に陥つた。いや、ほんとに、愛川さんが通報してくれなければ、その子は間違いなく、死んでました。大変なお手柄ですよ」

後で感謝状が出ますよ」

琴美「ありがとうございます」

刑事「で、ですね……。いくつか分らない事があるので、少し質問させてもらつてもよろしいでしょうか。いや、別に大した事じゃないんですが、一応、警察としての立場上、はつきりさせておかなくては、ならないものですから……。よろしいでしょ

うか? 愛川さん」

琴美「あ、はい……。どうぞ」

刑事「それでは、まず……。あなたは隣のアパートのベランダで、子供が助けを求めているのを見たので、急いで通報したと、そうおっしゃってましたね」

琴美「はい」

刑事「しかし救急隊員の話では、子供が見つかったのは、アパートの寝室だったと、そう言ってるんですが」

琴美「……子供が戻つたんだ、と思います」
刑事「そうですか。しかし救急隊員は、子供は衰弱がひどく、意識もなく、とても動ける状態ではなかった、と言ってるんですが」

琴美「……いえ……。私はあの子供が、ベランダをようやく這っているのを、見たものですから……。それでおかしいと思つて、通報したんです」

刑事「……なるほど……。しかし、ベランダにでる戸は、閉まってました。これは子供が、自分で閉めたんですか?」

琴美「……はい、そうだと思います」

刑事「子供がベランダの戸を開けるところを、あなたは見ましたか?」

琴美「……いえ、見てません」

綾乃「(いらだつた様子で) 刑事さん、それぐらいに、してくれませんか。愛川さんは、入院中ですよ。疲れては、良くないんです」
刑事「……そうですな。失礼しました。そ

れでは最後に一つだけ、質問をさせてくれませんか……。よろしいですか？」

綾乃「(ため息をつく)」

琴美「……。はい……。どうぞ」

刑事「実は、この病室に入ってから、気が付いたんですが、……。愛川さん、あなたは両足に怪我をして、ベッドから起き上がれない状態ですね」

琴美「……。はい」

刑事「ベッドの位置から見て、あなたは窓から、隣のアパートを覗けないと思うんですが、……。これはどうですか？」

SE 少しの沈黙。部屋の外から、昼間の病院の、喧騒の音が聞こえる。

綾乃「それは……。刑事さん、私が説明します」

刑事「はい、どうぞ」

綾乃「昨日の昼間ですけど、愛川さんが、どうしても外を見たいと、おっしゃるものですから、私がベッドをずらしたんです。窓の所まで」

刑事「ベッドをずらした？」

綾乃「はい。で、それを戻すのを、忘れていたんです。ですから夜の間に、愛川さんは、窓から外を覗けたんです。もちろん隣のアパートも……。で、今朝になってから、気付いて、私がベッドを元に戻したんです」

刑事「……。なるほど、それで説明できますな……。それではそういう事にしましょう……。いや、長いこと邪魔しました。もう帰ります。いろいろと、ありがとうございます」

琴美「いえ、こちらこそ……。あの、刑事さん」

刑事「はい、何でしょう？」

琴美「その子供が住んでいた、アパートの部屋ですけど……。もしかしたら、13号室ですか？」

刑事「ちよつと待ってください……。えーと、27号室ですね」

琴美「(がっかりした様子で) そうですか」

少しの間。

琴美「吉井さん、さつきはありがとう。ベッドをずらした、なんて言ってくれて」

綾乃「何でもないわ、そのくらい……。だって本当のことを話したって、あの刑事さんが、信じてくれるわけ、ないでしょう……。あの子供の魂だけが抜け出して、あなたに助けを求めてきた、なんて」

琴美「そうよね、信じてくれるわけ、ないわよね。信じてくれるのは、吉井さんだけ」

綾乃「私は信じるわよ、愛川さん。しっかり信じるから」

琴美「ありがとう、吉井さん……。でも良かったわ、あの子が赤い服を着ていること

に、気がついて。吉井さんから、隣のアパートの子が、いつも赤い服を着ていると聞いてたから、あの瞬間、気付いたのよね。多分あの子だ、て」

綾乃「ほんとに、私が話してなければ、絶対分らなかつたわ。でもそういう事も、あの子の助かりたい、生きたい、という執念のおかげかもよ」

琴美「ほんとに……。でも吉井さん、あの子はどうして、私の部屋に来たのかしら。13号室に」

綾乃「うーん、それは、分らないわ」

琴美「(独り言のように) なぜ、私の部屋に来たのかしら？ ほかの部屋ではなく、私のところに？」

綾乃「愛川さん、もうそんなことは、考えないで……。とにかく今晚からは、ぐっすり眠れるんだから。もう子供の声に、悩まされることも、なくなつて」

琴美「(独り言のように)……。そうなのかしら。もう子供は来ないのかしら……。あの時あの子は、私が気付いて、急いでナースコールをかけたから、嬉しそうに笑って、それでずっと消えた……。本当に、本当に、もう子供は来ないのかしら……」

SE 昼間の病院の、喧騒の音。

SE チャイムの音。

アナウンス「ただいま午後十時になりました。
入院患者さんの、消灯時間です。入院患者
さんは、速やかに自分の病室に戻って・・・
(F・O)」

SE 遠くから、子供(4)の音が聞
こえる。

琴美「来たわ、いつものように」

子供「(遠くから)お母さん、お腹すいた」

琴美「だんだん、こっちに来てるわ」

子供「(前よりも近くなって)お母さん、お
腹すいた・・・お母さん、お腹すいた」

琴美「近くなってきた。8号室の前・・・
10号室の前・・・、その調子・・・。1

1号室の前」

子供「(さらに近くなって)お母さん、どこ
にいるの・・・。お腹すいたの。お腹すい
たの」

琴美「それでいいわ、こっちへ来て、・・・。

さあ、もう部屋の前、ドアを開けて」

SE ドアを開ける音。

琴美「さあこっちへ来て。・・・今日は男の
子だわ」

子供「(すぐ近くで)お腹すいたの・・・」
琴美「お腹すいたの? かわいそうに・・・。

ね、お姉ちゃんね、あなたを助けてあげる
ことが出来るの。だからお姉ちゃんに、あ

なたの名前を教えて。それと住所と。住所
って、住んでる所のこと。よく分らなかつ
たら、大体でいいから。それであなたを助
けてあげることが出来るのよ。・・・さあ、
まず、名前から・・・(F・O)」

(了)